

本州唯一のナベツルの越冬地

「自分ちの田んぼなのに、迂闊に入れないんですよ」

本州唯一のナベツルの越冬地、山口県周南市（旧熊毛町）八代地区で耳にした言葉に、思わず聞き返した。冬期間、地元農家は盆地中央の餌場となる田だけでなく、田んぼ一帯に入れない。だから、基本は米作り一本という。八代盆地に足を踏み入れると、草刈りが見事に行き届き、驚くほど静かだった。

ツルが飛来すると、地区内の工事関係はすべてストップする。建築関係も小さな火も大きな音を立てることも御法度だ。ほ場の工事も稲刈り後からツル飛来までの一ヶ月間と、ツルが去り、代かきまでの一ヶ月間のみ。「ツル様」と地元は冗談めかして言う。

シベリアから南下してくるのは十月後半。毎年それぞれしながら空を見上げる。第一陣が来たら、ほつとするという。ナベツルは家族で動き、幼鳥期に過した場所に帰るといふが、徐々に八代への飛来が減ってきている。この秋、八代への飛来数五羽。だが、飛来早々、一羽が行方不明となり、四羽となった。

八代の人々とナベツルのつきあいは長い。江戸時代、幕府による鶴捕獲禁止令があり、全国で見られたというが、明治に入り全国で乱獲。けれども、八代村だけはツルの捕獲を禁じた。そして、他村の猟師が八代でツル撃ちをしたことを機に、村では県に捕獲禁止を求め、明治二十年（一八八七）、県令の捕獲禁止へとこぎつける。八代は、近代の自然保護制度発祥の地なのである。

明治二十五年には国の保護鳥となり、大正十年（一九二一）、八代への飛来数は百羽を記録。さらに地域全体が国の天然記念物の指定を受けた。

昭和十五年（一九四〇）に飛来数三五五羽と最多を記録。昭和三十年、特別天然記念物に指定され、継続的な給餌を開始。昭和五十三年以降、飛来数が百羽を切るようになる。そこで昭和六十年、地元は「ツルを愛する会」

忘れられた大地の物語を求めて

八代盆地のナベツル

（山口県周南市 旧熊毛町八代）

山口県周南市



取材協力・山口県農村整備課
八代南土地改良区

ライター 石井 里津子

を発足させ、ねぐら整備も手がけるように。だが、平成十九年（二〇〇七）、ついに一〇羽を切った。

田んぼを作らねば、ツルとの共生はない

八代の人たちは、ナベツル飛来の減少で自分たちの暮らしそのものを見つめ直してきた。ツルの数は指標となった。地元は多くを議論した。ツルが減る理由は何か、どうあるべきか——。平成に入り着手したほ場整備事業（※1）もまた同じである。

「啜々囁々でした」

当時をよく知る八代南土地改良区（※2）前理事長、徳本仁（ひとし）さんが話す。

「話がまとまらず、ご破算にもなった経緯もあります。ツルと人のどちらが大事なんだと。結論はというと、田んぼが荒れてはツルが来なくなる。田んぼは機械が入るよう整備せよと荒れる。荒れんように、ほ場整備をやるうじやないかと」

昭和後半、減反を機に不便なところから荒れていた。とくに、ツルのねぐらは、山の最も奥の谷田（谷地田）。真っ先に放棄が進んでいた。草が繁茂する場所にツルは来ない。同改良区理事長、廣永洋二さんが言う。

「ほ場整備をしていなかったら、多くの田んぼが荒れていたでしょう。ここは1haの中に百枚以上田んぼがあったところ。一枚が二〜三平米ぐらいの田んぼも多くて、よその地区は道路の舗装も進み、まるで、ここだけが取り残され



八代南土地改良区事務所横、ほ場整備の完成記念碑の前で。記念碑には「圃場成る 三百町歩 鶴を待つ」の句が。右から同改良区前理事長の徳本仁さん。NPO法人ナベツル環境保護協会副会長、ツルを愛する会4代目会長でもある。その隣は同改良区副理事長でツルを愛する会会長の久行信明さん。碑を挟んで、同改良区理事長でツルの郷を守る会代表の廣永洋二さん。左端は同改良区事務局長の河村清さん

ていたような場所でしたね」

副理事長の久行信明さんが続けた。

「昔からここは湿地で、はまってはまって腰まで浸かるほど。鍬も取られ

る。そういうところは牛も入れないから人力ですよ。ふけた(深い田)と言ってね。暗渠を入れ、田んぼの排水を良くして、機械が入るようになったんです」

また、事業では、ツルが歩けるよう畦畔も太く、勾配も緩やかにした。外敵に狙われにくいよう高さも抑えた。給餌田も湿田化し、水場を設けたほか、水路はフリーロクク(※3)で施工した(多自然型水路)。ナベツルの餌となるドジョウ、タニシ、カエルなど水棲生物の生息地の確保だ。さらに、ツルがねぐらとしていた荒廃田も一・四ha復元した。

タガメにゲンゴロウ、ホタル……八代の自然が復活

「これから自然環境をどう守っていくかが、この地域の大きなテーマなんです」

徳本さんが言う。整備事業を機に、平成十八年(二〇〇六)に誕生した農事組合法人「ファームつるの里」では、減農薬減化学肥料に取り組み、また、湿地の代わりとなるよう「冬期湛水農法」にも取り組んでいる。

「農家のみなさんがツルのことを考え、一年一年進めてきたので、八代の自然は今、復活しているんですよ。ホタルも増えて、夏にはホタル祭りが開催されます。地元の子どもの調査ではゲンゴロウやタガメ、タイコウチなどが三年ぐらい前から見つかっています」

周南市立八代小学校では毎年、ツルの郷を守る会(※4)



ねぐら整備は毎年10月第1土曜日に実施。近年は地元の壮年層で結成する「夢現塾」や企業ボランティアなどが参加。代かきをし水を張る。かつて田に陰を作らぬよう周辺の木も手入れしていたように、伐採も行つた。滑走のための空間確保だ。提供：周南市役所八代支所(鶴いこいの里交流センター)



ナベツルの家族(1月17日)。盆地中央の給餌田にて。昔から、夕方にツルが集まる場所がここ。夏場はここで「ツルを愛する会」がツルの餌となるコシヒカリを栽培する。餌は粳と玄米の両方を用意。八代盆地はどこも「みんな、なめるように草を刈る」とか



盆地中心部にある壱鶴地(=ツルの墓)。12月の第1日曜日に「鶴供養祭」がある。八代にある「ツルの墓」3カ所のうちの一つ。文政3年(1820)、里人が家族同様に葬った「つる塚」からはじまり、この地で命を落としたツルを供養してきた

とともに田んぼや水路に入り、生きものを観察する「水辺の教室」を行っている。平成二十七年九月の調査では、タガメ(絶滅危惧二種)、ガムシ、コオイムシ(準絶滅危惧種)なども見つかった。

そのほか、子どもたちは、代々続く「つる日記」を発行したり、「鶴の舞い」を継承したり、ツルのデコイ(模型)設置の手伝いなど、ツルは学びの一部ともなっている。もはや自然保護と農業農村振興は相反するものではなく、同じ根を持ち、ともに豊かな土壌を育むものであることを八代は教えてくれる。

八代では昔から、ツルが夕方ねぐらへ飛び立つ様に暮らしや心を重ね、愛着を持ってきた。ツルとの共生が、うまい米や環境を守り、子どもたちを育て、文化となり、地域の核となった。だから、ツルを大事にする。

長い間、「子ども百人、ツル百羽」と言われてきた。ツルの数と八代の子どもの数は、まるで共振するかのようになり通ってきた。平成二十八年度、八代小学校は全校児童十一人(※5)。そして三月、北帰行途中の四羽が訪れ、今季のナベツルは八羽となった。

ツルも子どもも、地域を照らす希望である。

※1…ほ場整備事業は次のとおり。●県営ほ場整備事業…平成四〜十三

年(区画整理/生態系保全水路) ●経営体育成基盤整備事業…平成十二〜十九年(区画整理/獣害防止柵/生態系保全水路) ●ふるさと水と土ふれあい事業…平成九〜十二年(ツルのねぐら整備/生態系保全水路) ●里地棚田保全整備事業…平成十四〜十六年(獣害防止柵/生態系保全水路) 中四国農政局HPより

※2…八代南土地改良区は、会員二〇六戸、面積一・二九三ha

※3…自然石を模したコンクリートを金具で連結し、法面に敷き詰めたもの(農政局HPより)

※4…平成十九年に、ほ場整備後の農地環境を守ろうと発足

※5…かつて八代村は二五〇〇人規模。現在、七三〇人を切ったという



八代小学校の全校児童が「水辺の教室」で水生昆虫探し。午後、学校に持ち帰り学習したあと、ちゃんと田んぼに返す。提供：八代南土地改良区